

刻の中へためらひを捨て悔いを捨てわが生いど煮つまりてくる  
久家基美

「ためらひ」「悔い」といった心の中のごく繊細な部分をつかさどる情動は、人間らしさの根底をなすものなのだろう。老いは、そうした情動を薄れさせる。「わが生いど煮つまりてくる」、読みかえせば読みかえすほど、下句の切実なひびきが心にしみる。

なにを見ているのか蜘蛛は人間の四倍の数世界を見  
おり  
佐佐木定綱

蜘蛛の目の数は種類によってちがうらしいが、ふつう八個である。四個までならなんとなく想像の範囲内だが、八個となると何がどう見えるのかわれわれ人間には、全く想像がつかない。あえて想像外のことを歌材に選んだ冒險心が見どころか。

珠芽しゅめがなくて鱗茎白くたくはへて鬼百合に似る小鬼百  
合咲く  
斎藤佐知子

オニユリとオニユリは実によく似ていて、見た目はほとんど区別がつかないという。ネットで見ると、マニアっぽい人が、細部の差異をていねいに解説してくれている。「珠芽」「鱗茎」といったふつう使わない植物学の専門用語をあえて採用して、意味はただ「子鬼百合咲く」という簡単なものながら、言葉のアヤで読ませる技術はさすが。

ふるさとの小さき家島見ておれば母を恋うがに海鳥  
が鳴く  
後藤政基

下句、ややクラシックな感じはするが、古典和歌の懐

## 短歌の現在

### No.421 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

かしさがいいかたちで現代短歌に生かされている。「家島」は万葉集の歌にも出てくる島で、瀬戸内海の姫路沖にある。

ブローカという荒野に僕は立っていて行き交う人  
呼びかけている  
植山俊宏

「ブローカ野」は運動性言語中枢と呼ばれる人間の脳の一部。言語活動をつかさどる場所に立って、他者に呼びかけている、の意。あえて意味を求めずならば、今の自分は、思考のための言葉よりもコミュニケーションとしての言葉に賭けている、の意に読める。

朝もやのユトレヒト駅発ちしより独語蘭語の汽水満  
ち来る  
峰尾碧

オランダからドイツへ行くのか、ドイツからオランダに来たのか、どちらとも読めるが、後者だろうと想像する。ドイツから特急で来れば、ユトレヒトはオランダに入って二つ目か三つ目の停車駅。オランダ人の乗客が増えて半々ぐらいになったのだろうと読んだ。「汽水」というキーワードをうまく使った一首。

古里の酒の辛さよ二合目の触ればぬるき徳利のは  
だ  
服部崇

下句、うまいなと感心して読んだ。一本目の徳利を空けてしばらくして、二本目をとりあげたのだが、その間の時間が爛の冷えぐあいである。

自撮りするスマホの画面いつばいに家族を包む菜の  
花の黄色  
鷺沼あかね

最近、自撮りの短歌を見るようになった。NHK短歌